

Future Style Agenda

research project

発行・共同企画・編集

日鉄興和不動産
Future Style 総研 -
佐藤有希 畑中信二

共同企画・リサーチ・作成

Futurama - 内田友紀
公共とデザイン - 石塚理華
Unknown Meets Ethnography - 梅中美緒

目次

1. プロジェクトの背景	3
2. 調査アプローチの前提	4
3. 対象世代仮説	5
3-1. デスクトップサーチ	
3-2. 対象世代の前提・特徴の抽出	
3-3. アーキタイプ分類軸の設定	
3-3. ヒアリングの実施	
4. アーキタイプの概観	10

5. 4つのアーキタイプに見る価値観の傾向	
5-1. 家族観	16
5-1-1. アーキタイプ別解説	
5-2. 仕事観	30
5-2-1. アーキタイプ別解説	
5-3. 拠点観	40
5-3-1. アーキタイプ別解説	
5-4. 健康観	49
5-4-1. アーキタイプ別解説	
5-5. 所有観	58
5-5-1. アーキタイプ別解説	
6. エピローグ	67

1. プロジェクトの背景

人口動態の変化、テクノロジーの進展、価値観の多様化 —

こうした複層的な変化が日々加速する現代において「住まい」や「街」は、単なるハードウェアではなく、人々の生き方や暮らし方そのものと切り離せない存在である。従来の「家族モデル」や「働き方」を前提とした都市計画や住宅設計は、これからの時代においてどれほど有効性を持ちうるのか。その問いは、住宅やまちをつくる事業主体にとっても避けがたい戦略的課題である。

本プロジェクトは、日鉄興和不動産のコーポレートビジョンである「人と向き合い、街をつくる」を根幹に据えた調査研究活動の一環として実施された。**Future Style 総研**は、未来を見据えた観点から、同社の街づくりの根拠となる価値判断の軸を、生活者の実態に立脚してより明確にすることを目的に、本プロジェクトを立ち上げた。特に今回は、「**10年後に30代を迎える方々**」を中心とした価値観に焦点を当て、次世代の暮らしの理想像を構造的に把握することを試みている。

調査では、日々の生活に深く関わる**5つの観点（家族観 仕事観 拠点観 健康観 所有観）**に注目。それぞれにおける「理想」や「恐れ」、「意思決定の軸」について、当事者の語りを丁寧に辿ることで、これからの時代にふさわしい「暮らしの受け皿」としての街や住まいの可能性を考えるヒントを探った。

10年先の暮らしの提案を、いまから考える。テクノロジーだけではない未来に向けた変化をどうとらえ、どう読み解くか？—それが、本プロジェクトに込められた基本的な姿勢である。そしてこのレポートは、そこで見えてきた新たな暮らしの兆しのヒントを、各々の事業戦略に活かすための補助線となることを目指している。

2. 調査アプローチの前提

本調査のアプローチについて

「10年後の30代（対象世代）の暮らしの理想像をリサーチする」というテーマにおいて、特に、日々の生活に深く関わる5つの観点（家族観 仕事観 拠点観 健康観 所有観）に焦点を当て、それぞれの理想の変化を明らかにすることがプロジェクトのスコープにある。

リサーチの実施にあたって重要なのは、かつて語られた住宅すごろくのように、暮らしの価値観が画一化された時代とは異なり、対象世代はひとくくりに語ることができないほど価値観や暮らし方が多様化し、「それぞれの価値観や嗜好性を独自の形で深めている」傾向がある。

つまり、「家族・仕事・拠点・健康・所有」の個別事象をリサーチするアプローチでは、個別の違いが際立つばかりで、未来の30代の暮らしの全体像を捉えることは難しい。

そこで、本リサーチでは、**首都圏近郊に在住の、10年後の30代（対象世代）**の理想の暮らし像をより多面的・構造的に捉えるために、彼らが経験してきた社会変化をもとに、対象世代を4つのアーキタイプ（価値観や志向に基づく生活者像）に分け、それぞれのタイプにディープインタビューを行うことで、「家族・仕事・拠点・健康・所有」の理想像を

なぜ「アーキタイプ」をつかったアプローチが有効なのか？

(1) 価値観の多様化を踏まえた分析が可能

- 個別の質問設計では、個々の違いが際立つばかりで全体の傾向が見えづらい。そのため、まずは対象世代が経験してきた社会変化をもとに、対象世代の代表的な人生観・価値観のタイプ（アーキタイプ）を設定することが有効だと考える

(2) 実態に即したリサーチが可能

- アーキタイプを定義することで、「誰にとっての理想なのか？」という視点を明確にしながらリサーチを進めることができる
- アーキタイプを想定することで、将来的なライフイベントの意思決定の方向性もそれぞれの価値判断に基づいて見込みやすくなる

(3) 生活全体のつながりを考慮できる

- 今回注目した「家族観・仕事観・拠点観・健康観・所有観」は、いずれも個別に完結するテーマではなく、相互に強く結びつきながら、生活者の意思決定や行動に影響を与えるもの
- たとえば「家族観」は、職業選択や住む場所の決定、健康意識や資産形成のスタイルにも波及し、逆に「働き方」や「所有の考え方」も、形成家族との関係性を大きく方向づける
- アーキタイプを設定することで、「対象世代の暮らしの全体像としての理想」を描きやすくなる

3. 対象世代仮説 —— 仮説に至ったプロセス

3-1. デスクトップサーチ

まず対象世代に関する多様な情報源をもとにデスクトップサーチを実施。主にZ世代を**対象**に社会背景や教育環境、価値観の変遷など、幅広い観点から情報を収集した。

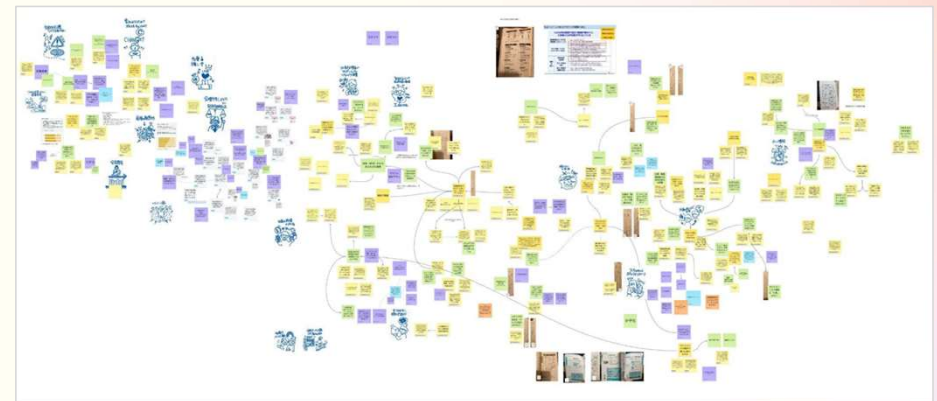
<補足：Z世代とはなにか>

Z世代とは一般的に1990年代後半から2010年代前半に生まれた世代を指す。物心ついたときからインターネットやスマートフォン、SNSが身近にある。“デジタルネイティブ”であり、多様性や個性を重視する価値観が特徴的。本調査の対象世代、10年後の30代としてZ世代の中核部分と重なっているため、デスクリサーチとして、Z世代に近い世代の傾向を調査した。

社会学やZ世代に関するマーケティング論、タイパ論、日本における世代ごとの価値観の変化など、幅広い分野の書籍やWeb記事等を参照。Z世代の特徴や傾向を抽出。抽出した情報はKJ法*を用いて整理した。

※KJ法：集めたデータや意見をカードや付箋に書き出し、内容ごとにグループ分けして全体の傾向や構造を明らかにする手法である。

整理後、各要素の相関関係を分析し、特に目立つ価値観を抽出。このプロセスを通じて、対象世代に共通する価値や他世代との異なる価値の全体像を客観的に把握した。



デスクトップサーチのスクリーンショット

参考文献・論文			
Life Design Agenda参考文献・論文			
As Name	Author	Tags	
個人化する社会の想像力	渡部知子：横浜国立大学 准教授	家族 社会制度	
タイパの経済学（2023）	廣瀬源	Z世代 価値観	
「今日の若者」のリアル	山田 昌弘ほか（オムニバス）	Z世代	
Z世代 若者はなぜインスタ・TikTokにハマるのか？（2020）	原田竜平	マーケティング 価値観 Z世代	
Z世代に学ぶ超バズテク図鑑	原田竜平	Z世代 マーケティング	
恋愛社会学：多様化する恋愛関係に接近する	高橋 幸、永田夏実	社会制度 価値観 家族	
Z世代の家族観		Z世代 家族 恋愛	
問いからはじめる家族社会学	岩田映子、大和玲子、日田幸子	家族 社会制度 価値観	
21世紀家族へ	渡部 恵美子	家族 社会制度 価値観	
希望格差社会、それから	山田 昌弘	価値観 社会制度	
Z世代の若手社員がぶつかる新たな課題「2年目の壁」とは	日経ビジネス電子版	Z世代 仕事	
入社直後に転職サイト登録。30代の仕事観って？ 3分解説	Nikkei		
ふたりのババ	https://www.youtube.com/cha		
価値観ファーストな若者たちー若者の家族・恋愛観についてー	https://horizon-jma.jp.org/?p=	Z世代 家族	
日本の20代から30代、40代への世代価値観の変化			

参考文献のリスト

3. 対象世代仮説 —— 仮説に至ったプロセス

3-2. 対象世代の前提・特徴の抽出

リサーチの結果をもとに現代の対象世代を特徴づける要素を抽出。ここで、Z世代には従来世代とは異なる**3つの前提**と**16の特徴**が存在することが明らかになった。

P4で述べたように、対象世代は「ひとくくりに語ることができないほど価値観や暮らし方が多様化している」。Z世代に関するマーケティング本でも、その多様性は繰り返し強調されている。一方で、デスクトップサーチを通じて、全く傾向がないわけではなく、共通する背景や特徴も存在することが明らかになった。

本レポートで示す「**3つの前提**」は、対象世代の価値観の土台となるものであり、彼らが育った時代や社会環境、教育方針の変化などから大きな影響を受けている。

「**16の特徴**」は、3つの前提を基盤としながら、対象世代の**社会的な行動や思考のパターン・傾向**を示したものである。

これらの特徴は一人の対象世代がすべて持つわけではなく、また粒度もさまざまである。前提は多くの対象世代に共有されているが、そこから生まれる行動パターンは人によって異なる場合もある。一方で、多様なパートナー観や家族の親密さなど、広く影響を及ぼしている特徴も見られる。

3つの前提 | Z世代の価値観や行動の土台となる、時代背景や社会環境、教育方針の変化などから生まれた根本的な考え方



16の特徴 | 3つの前提を基盤として現れる、Z世代の多様な行動パターンや思考の傾向



3. 対象世代仮説 —— 3つの前提と16の特徴

3つの前提 | Z世代の価値観や行動の土台となる、時代背景や社会環境、教育方針の変化などから生まれた根本的な考え方

Z世代の価値観や行動の根底には、時代背景や教育方針の変化などから生まれた「3つの前提」が存在する。本ページでは、それぞれの前提がどのように形成され、Z世代の意識や行動にどのような影響を与えているのかを詳しく解説する。これらの前提を理解することで、対象世代の多様な特徴や行動パターンの背景がより明確になる。



①「報われない・持たざる世代である」という世代認識

- バブル崩壊後の経済停滞やリーマンショック、東日本大震災、コロナ禍など、社会の大きな変化や不安定さを経験してきた世代
- 社会に対する停滞感や諦め、人口動態から生じる構造的な世代間対立
- 無理かもしれない経済的成功の達成よりも「今日をどう心地よく過ごせるか」が価値判断の基準

特徴的なシグナル

[ウェルビーイングへの意識の高さ](#)、サブスク利用や推し活など“少額だが高密度”の体験消費志向



②「あなたらしさ」が存在することが前提である教育方針

- 個性尊重型カリキュラム（98改訂～）で“自分探し”を制度化
- 探究学習や早期キャリア教育で将来像を主体的に設計
- 見られ方に敏感なため、目立つことには全体としてやや消極的

特徴的なシグナル

MBTIやパーソナルカラー、骨格診断の流行



③ SDGs・社会課題が教育プログラムに組み込まれた世代

- 2017年告示の新学習指導要領では「持続可能な社会の創り手を育む」が明記
- 高校・大学入試でもSDGsが時事問題として扱われる機会が増え、進路指導上もSDGsへの基本的理解が前提となりつつある

特徴的なシグナル

[旅行会社が学校向けにSDGs体験型ツアーを商品化](#)、[SDGsは福利厚生と並ぶ“選社基準”](#)に

3. 対象世代仮説 —— 3つの前提と16の特徴

16の特徴 | 3つの前提を基盤として現れる、Z世代の多様な行動パターンや思考の傾向

ここでは、3つの前提を基盤に現れる対象世代の行動や思考の傾向を16の特徴として示す。各特徴は日常やキャリア、対人関係に表れる多様なパターンであり、対象世代の多様性や個性を理解するためのヒントとなる内容である。ただしこれらのパターンは世代全体を一括りにするものではない。人ごとにどの特徴をもっているかにばらつきがあり、多様なパターン・傾向が混在している点にも留意したい。



3. 対象世代仮説 —— 仮説に至ったプロセス

3-3. アーキタイプ分類軸の設定

共通傾向を踏まえ、デスクリサーチで抽出した特徴やキーワードをもとに、アーキタイプの分類軸となりうる要素を整理。

これらのキーワードをもとに、Z対象の価値観や人生観をいくつかの代表的なアーキタイプとして仮説的に分類。この仮説を元にインタビュー・調査の設計指針とした。

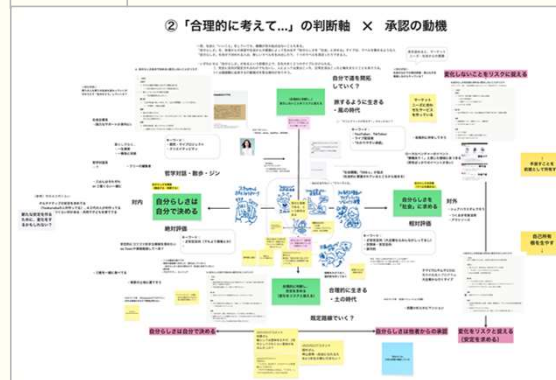
POINT

対象世代の要素のヒントとなる
キーワードの抽出

- ・ リスク回避の個人
- ・ ポリシー維持＞責任
- ・ 自律性と合理性
- ・ 不確実性への不安
- ・ 合理的に判断：
安定を求める（変化をリスクと捉える）
⇒変化しないことをリスクと捉える
- ・ 「成長」意欲へのグラデーション
（そもそも「成長」とは何か？）
- ・ 自分らしさ⇔自分らしさを諦める
（≒安定）
- ・ それでも「自分らしさ」は感じている

POINT

共通傾向を踏まえて抽出した特徴やキーワードを
整理・配置しながら、分類軸を探っていく試行過
程の様子



POINT

3つの前提・16の特徴を2軸でマッピングしながら
軸の検討を重ねていく、**試行錯誤のプロセス**を可視化したもの



3. 対象世代仮説 —— 仮説に至ったプロセス

3-4. ディープインタビューの実施

本調査では、対象世代16名を対象に、1人あたり約1時間半のオンライン（Zoom）ディープインタビュー（仮）を実施。
リクルーティングは、各象限（タイプ）に3～4名ずつ、年齢、ジェンダー、居住地、所属の偏りなく配置することを想定して行った。

暮らしや人生観の検討が進む20代中盤～30代前半（社会に出て3年目以上）をターゲットにした。
インタビュー前には、事前課題（宿題）として以下3点を記入・提出してもらった。

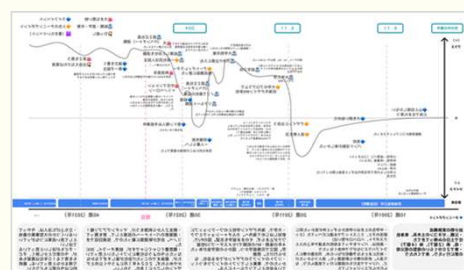
宿題1：ムードメーター（これまでの人生のやる気やモチベーションの変化をグラフ化したもの）

ムードメーターとは、これまでの経験を振り返り、やる気やモチベーションの変化をグラフで可視化するものであり、今回は「これからの理想の暮らし」についても未来のモチベーションの変化を想像して描いてもらった。

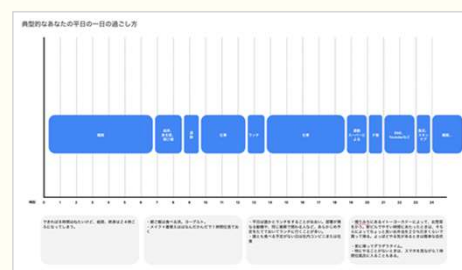
宿題2：平日の1日のタイムスケジュール（典型的な1日の過ごし方）

宿題3：家の中のお気に入りの場所の写真とその理由

インタビューは、提出された宿題をもとに、各項目について深掘り行った。



宿題1：ムードメーター



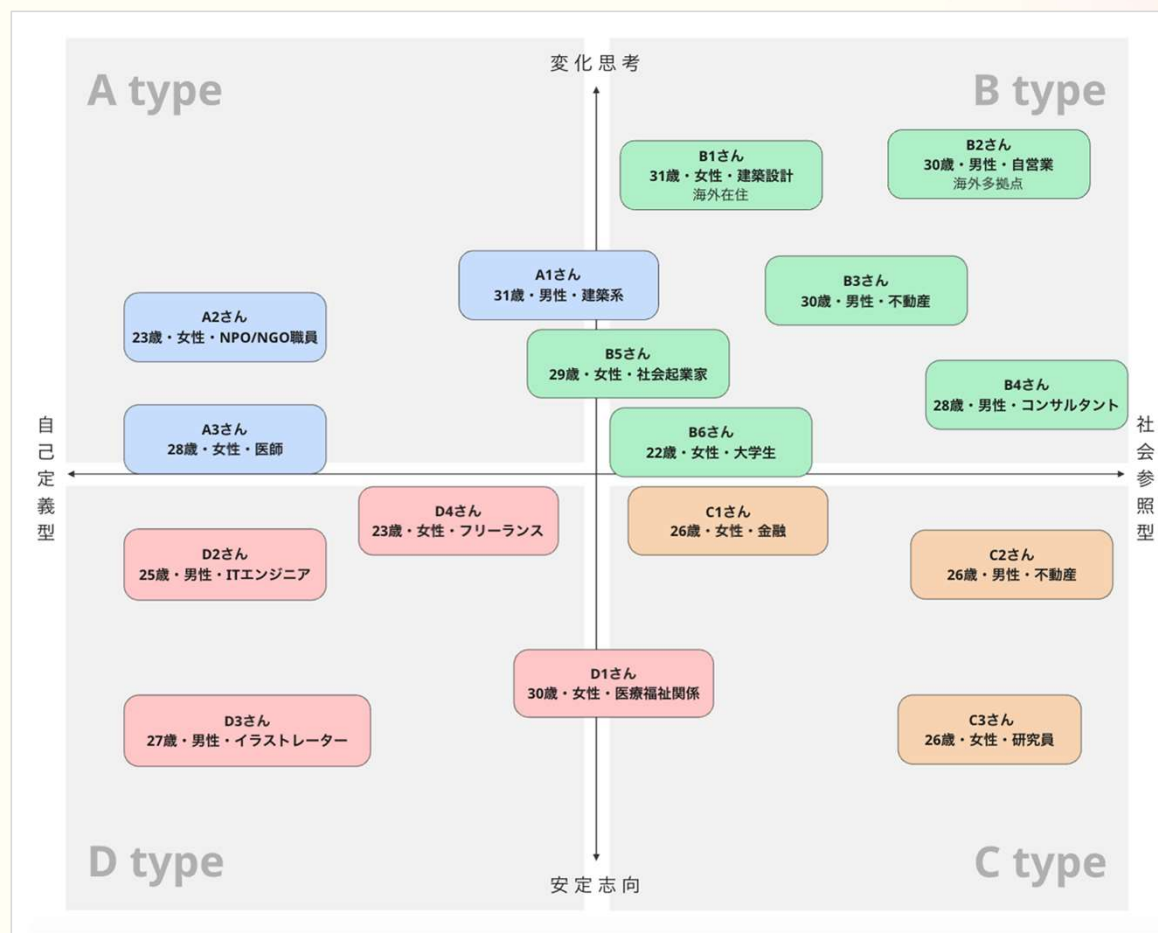
宿題2：1日のタイムスケジュール



宿題3：家の中のお気に入りの場所の写真と理由

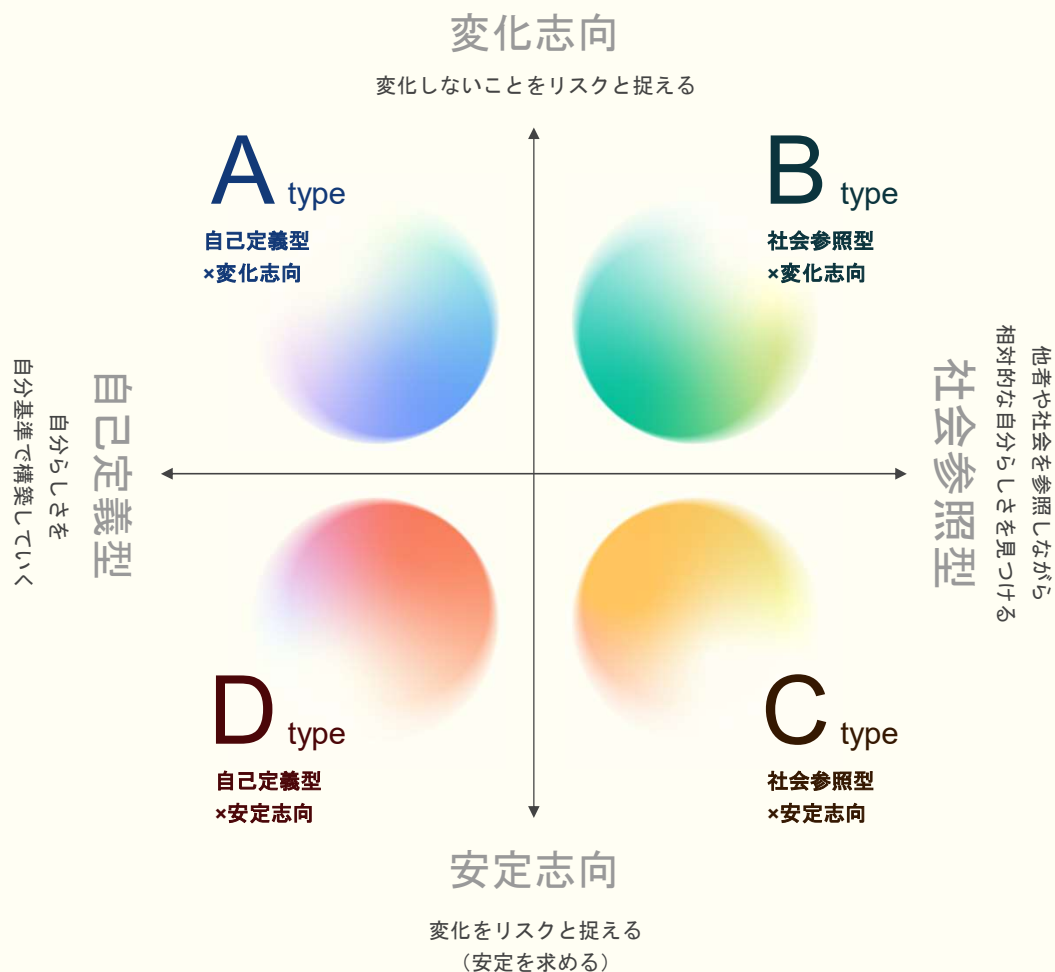
3. 対象世代仮説 —— 仮説に至ったプロセス

3-4. ディープインタビューの実施



対象世代16名のポジショニングマップ

4. アーキタイプの概観 —— アーキタイプの軸と4つのタイプ



ヒアリングの結果を踏まえ、アーキタイプの分類軸をさらにブラッシュアップした。対象世代が持つ多様な価値観や人生観をよりの確に捉えるため、下記のような分類軸を新たに設定。この分類により、対象世代がどのように自分らしい生き方や働き方を模索し、家族や社会との関わり方を選択しているのかを、より具体的に捉えることができる。

自己定義型—社会参照型 | 横軸

「自分らしくありたい」という意識は共通するが、内面の基準で組み立てるか、他者・社会の動向を手がかりに相対的に見いだすか、その定義方法には二つのスタイルがある。

変化志向—安定志向 | 縦軸

合理的な判断のもと、リスクはなるべく取りたくないという点では共通しているものの、「変わることをリスクとするのか」「変わらないことをリスクとするのか」については、どちらをリスクとみなすかに明確な志向差がある。

4. アーキタイプの概観

Atype

自己定義型
× 変化志向

「こうあるべき」から自由になることを信条に、家族・働き方・暮らしを自らの価値観で再構築していく。



“ 他人と暮らしたいという思いが強いが、
その人が結婚とか家族とかそういう型をはめなくても良い ”

Btype

社会参照型
× 変化志向

移動も住まいも仕事も人間関係も軽やかに、「選択できる余地」を残すためにポジションを形成する。



“ 働き方は週半分くらいを本業にしたい ”

Dtype

自己定義型
× 安定志向

好きなことに携わり続けるために、スキルや経験をアップデートする。



“ 世界中のどこでもできる、
なんとかなる算段がついている ”

Ctype

社会参照型
× 安定志向

徹底的に計画した範囲で、家族と仕事の基盤を構築して安定運用する。



“ 10年単位でプランを立てるのが好きで、
結果的にプランABCの範囲で実現できます ”

世代共通の傾向

- 前の世代（Y世代・ゆとり世代）と比較して出身家族*との関係が親密（* P18）
- 自分が「負けない」ポジション・領域を見極める
- 前の世代（Y世代・ゆとり世代）と比較して、健康や睡眠、ウェルビーイングに対する意識が高い
- 社会・経済状況を見据えながら、子どもの数や育成環境を現実的に判断
- SNSへの信用は慎重なスタンス。
発信よりも閲覧中心

5. 4つのアーキタイプに見る価値観の傾向

本ページは、4つのアーキタイプに沿って実施したディープインタビューと既存調査をもとに、各タイプに見られる価値観や傾向の概観を提示するものである。

これらのアーキタイプは、特定の人物像を類型化・固定するものではなく、変動する時代を生きる個人の声から立ち上がった、多様で重層的な価値観を統合・整理したもので

ある。以降では、「家族観」「仕事観」「拠点観」「健康観」「所有観」という主要な観点ごとに、それぞれの特徴を掘り下げていく。

今後の住まいや暮らしの在り方を再考する際の、多角的な視点の一助となることを意図している。



Atype 自己定義型
× 変化志向

「こうあるべき」から自由になることを信条に、家族・働き方・暮らしを自らの価値観で再構築していく。

(形成) 家族は「こうあるべき」ではなく、互いの自分らしさを大切にできる関係性。制度や血縁にとらわれず、共感や信頼を軸に、自由を支え合うパートナーシップを求める。



Btype 社会参照型
× 変化志向

移動も住まいも仕事も人間関係も軽やかに、「選択できる余地」を残すためにポジションを形成する。

形成家族は、対等なパートナーシップのもとに築く「協働体」。役割や拠点を複数持ちながら、変化を前提とした柔軟な関係性と共存のかたちを模索する。



Ctype 社会参照型
× 安定志向

徹底的に計画した範囲で、家族と仕事の基盤を構築して安定運用する。

理想の生育家庭を再現するかたちで、家族を人生設計の核と捉える。家族時間の安心と充実をめざし、拠点や働き方も家族を中心に整える。



Dtype 自己定義型
× 安定志向

好きなことに携わり続けるために、スキルや経験をアップデートする。

「好きなこと」起点の仕事を軸に据えつつ、形成家族とは対話を通じた共創関係を築く。拠点や暮らし方は固定せず、その時々最適解を柔軟に更新する。

5. 4つのアーキタイプに見る価値観の傾向



Atype 自己定義型
× 変化志向

会社や肩書きに依存せず、自身の価値観を起点に複数の仕事やプロジェクトを並走。自ら設計した時間と裁量を通じて、理想のあり方を模索し続ける。

拠点は機能よりも意味を持つ存在であり、自身のアイデンティティを補強する場として活用。複数拠点には、それぞれに異なる目的や感情の居場所を求める。



Btype 社会参照型
× 変化志向

ひとつの仕事や組織に依存せず、選べる状態(ポジション)であり続けることが重要。複数の肩書きや拠点、働き方を組み合わせ、生活とキャリアの両立を追求する。

拠点は、ライフステージや仕事・家族構成に応じて最適化すべき流動的な環境。都心と地方を行き来しながら、暮らしやすさと機能性を柔軟に設計する。



Ctype 社会参照型
× 安定志向

家族との時間と生活の安定を軸に、長期的なキャリア像を描きながら着実に実行。家庭と過ごす時間を確保するため、裁量のある働き方を計画的に選ぶ。

地縁や馴染みのある地域への愛着が強く、変化よりも継続を重視。信頼感や安心感を基盤に、生活の拠点を慎重に選ぶ。



Dtype 自己定義型
× 安定志向

「好き」に根ざした専門性を深め、学びと実践を往復しながら独自のキャリアを築く。安定した足場を構築した上で、自身の関心領域を探究し続ける。

住む土地には固執せず、家族や子どもの状態に合わせて柔軟に移動。自然に囲まれた環境で、のびのびと子育てできる暮らしを理想に描く。

仕事観

拠点観

5. 4つのアーキタイプに見る価値観の傾向



Atype 自己定義型
× 変化志向

食事や睡眠は、結果ではなく日々を整えるプロセス。効率や数値、一般的な正解にとらわれず、自分にとっての心地よさを基準に調整する。

物質的な所有には執着せず、生活は必要最小限。投資対象は資格取得や社会的実践など、自己の思想の補強・実現や成長につながる活動に向ける。



Btype 社会参照型
× 変化志向

健康は、暮らしと仕事のパフォーマンスを支える土台。記録と実感を頼りに、長期的な安定と快適さを持続的に調整する。

所有よりも、経験や人的ネットワークといった無形資産への投資を優先。多拠点や副業など、選択肢を広げるための基盤づくりを意識的にする。



Ctype 社会参照型
× 安定志向

心身の安定を維持するために、食事・睡眠・移動などをルーティン化。無理のない習慣として設計し、自分に合う心地よさを優先する。

将来への備えとして、情報収集と比較検討を重ねながら着実に判断。安心と安定を支える資産選びに、計画的な視点を欠かさない。



Dtype 自己定義型
× 安定志向

暮らしの中で省力化と効率性を追求しつつ、食は探究の対象として重視。食を通じた学びや楽しみを、日常に組み込む。

スキルや経験は資産であるという確かな自負を持ち、物的所有よりも学びや好奇心への投資を重視。関心の広がりを価値と捉え、無形資産を積み重ねていく。

健康観

所有観